

令和6年度 自己評価及び学校関係者評価書

資料3

令和7年(2025年)3月10日
市立札幌開成中等教育学校

1 本年度の重点目標

課題探究的な学習に向き合う環境 / 様々な文化・価値観との出会い、交流できる環境 / 安心して挑戦できる環境

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
重点目標	国際バカロレア(IB)が示す10の学習者像を意識した日常的な取組に努め、MYP(Middle Years Programme)およびDP(Diploma Programme)認定校の実現を目指し取り組むことができたか。	A	MYP・DP認定校として、国際バカロレア機構(IBO)と連携し教育活動を推進している。認定校としての評価と課題について、職員の研修会を3種類に分けて設定し、IBの理解度や課題の段階に対応できるようにした。それによって、教員同士で協働設計の理解と学びが深まり、IB教育の理念や本校の目指す学校作りに対する共通理解を図ることができた。	A	A
	SSHの取組を通して、教育課程の充実を図ることができたか。	A	SSH指定Ⅲ期3年次目として、文部科学省より中間評価ヒアリングを実施した。主に、第1学年から第6学年までの全生徒が6年間を通して個人研究からグループ研究へと拡げて課題研究を行い生徒の探究力を高めていることや、SSH意識調査及びリテラシー・コンピテンシーの測定で研究開発計画の進捗状況を客観的に分析し次の研究計画の改善に生かしていること等が評価された。	A	A
	重点目標の内容は、学校や生徒の実態を踏まえた適切な設定となっているか。	A	本校では、課題探究的な学習に向き合う環境を整えることを重点目標とし、SELFの理念をベースとしてIBの理念と手法およびSSHのフレームを活用している。IBでは多様な文化の理解と尊重の精神を、SSHでは科学的素養の育成と持続可能な世界・地域を創造するカリキュラム、開発を開校以来継続している。そのために、地域の進合町内会やパートナー校、高大、産学の連携を強化し多数の支援者からの協力を得ている。生徒の外部の研修会や発表会への参加意識は高く、今後もこの状況を維持していく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。校内の研修会を3種類に分けて行うなど、教員間の理解を深める努力に敬意を表します。				
教育課程・学習指導	【課題探究】「なぜ、どうして」を大切にしたい。生徒自身が学びの主人公となる「課題探究的な学習」を充実することができたか。	A	各教科の工夫による課題探究をベースとした指導が一層進められた。IBCの学校開発プラン研修によりユニットプランナーの見直しと提出が行われ、各教科における学習方法や課題設定、概念とのかかわりについて理解が深まった。また、今年度より新しい形での学際的単元の授業が始まったことにより、教科を越えたユニットプランの作成を通して教科間の交流が深まった。今後、改善を加えながらよりよい授業作りを目指していく。	A	A
	【専門性】理数英の専門学科の特色を生かした教育課程を編成することができたか。	A	SSHの学びの集大成であるコスモサイエンスの取組について、実験・実証の方法など、必要な知識やスキルを身に付けることのできる教育課程の編成に努めた。また、研究成果報告会ではオンラインによる発表を併用しつつ、英語でのプレゼンテーションも行うなど多彩な手法とアイデアでより多くの生徒が参加できる実施方法を整えることができた。教科としても、ネイティブ教員による英語による授業実施のコースを設けるなど、コスモサイエンスの取組と結びつく段階的な指導を実現することができた。	A	A
	【バランス】知徳体のバランスがとれた教育課程となっているか。	A	今年度、生徒会中心に生徒が主体的に運営する「第1回開成運動交流祭」が開催され、異学年と交流する良い機会となった。道徳・総合的な学習(探究)の時間、特別活動の横断的カリキュラムである「ここからだの時間」を効果的に設定するとともに、自らの健康維持や体力向上に生徒が主体的に取り組む工夫に努めた。道徳は道徳教育推進教諭による全体計画を元に各学年の担当者を中心に運営が進められ、指導の方法や状況に応じた指導内容の工夫など、きめ細かな対応ができた。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
生徒指導・教育相談	【育てたい生徒像】生徒がTPOに応じたふさわしい対応ができるように支援することができたか。	B	日常的な気づきや対応を校務PC内にデータ入力・共有する方法により、個々の生徒に関する情報が円滑に共有できるようになっている。今後もこの方法を継続しながら、協議が必要な事案に対する迅速な対応を目指して、直接的・対話的な情報共有の重要性についても周知していく。改訂した「生活のルール」により、TPOを意識する考え方が浸透してきている。発達段階に応じた支援の適正化や教員間の共通理解を深めるべく、振り返りや確認の場を提供できるように努めていく。	A	A
	【異年齢交流】学校行事や生徒会活動を通して幅広い異年齢の交流を図り、生徒の自主性や協調性を育むことができたか。	A	学校の方針に基づいて各行事のねらいを明確化し、プロジェクト選択制(開成祭)、学年をまたいだ縦割りグループ(運動交流祭)による活動を実施できた。特に、運動交流祭における異学年間の交流は、多くの生徒から肯定的な感想を得られた。これらの取組を踏まえながら、更なる自主的・主体的な活動を目指した環境整備に努めていくとともに、異学年交流が年間を通じて意識できるような取組を考えていきたい。	A	A
	【教育相談】教育相談の充実を図ることができたか。	A	放課後に設定される教育相談時間や年間で設定される教育相談月間は、教員・生徒双方により、有効に活用されている。即時的な相談、定期的な相談の両面において、生徒理解の一助になり得るものとして今後も継続していきたい。ASSESS(学校環境適応感尺度)の実施は、個々の生徒の困り感や特性を知る手がかりとして活用できている。今年度、直接データ入力する方法に切り替えたことで、転記入力時のエラーを減らすことができた。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。改訂したルールの共通理解がより深まることでTPOに対する考え方が浸透することを期待します。				

(キャリア探究教育)	【主体的な取組】生徒が自らの生き方を主体的に考え将来を切り拓く力を養うことができるよう、進路探究の充実を図ることができたか。	A	生徒が主体的に考え、自分のため、社会のために動くことができる機会を提供するため、「Future Job Session(未来志向型進路探究学習)」や「コスモサイエンスプロセス(課題探究活動)」などのプログラム開発をした。次年度以降も継続して行っていく。	A	A
	【自己理解】体験活動を通して自分を知り、自立を目指すことができるような取組ができたか。	A	CSR活動(企業の社会貢献活動)に特化した職場体験活動をさらに発展させ、社会の中で自分らしく生きていくために必要な職業観・勤労観を身に付けることができるプログラムの発展型を研究実践していく。	A	A
	【社会とのつながり】変化の激しい変わりゆく社会で自らどういう役割が果たせるかを生徒自身が意識できるような取組ができたか。	A	「SA(奉仕活動)・CAS(創造・行動・奉仕)」を発達段階に応じて校内から校外へ発展させる中で、校内のニーズ、社会のニーズを探究する経験を積ませ、社会の中で自分が果たしていく役割を考えるプロセスを作っていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
保健・安全管理	【見守り体制】生徒の安全・安心・快適さを維持する環境を整えることができたか。	A	生徒の見守りは、生徒理解と支援に関する研修を定期的に行う、スクールカウンセラーなど専門的な立場からの助言を参考にしながら、支援の方法を確立する体制を構築した。IBプログラムが推進する日常的な貢献活動を通して、生徒は相互に安全・安心な環境を作り上げる意識を高めている。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
組織運営	全教職員が連携し、分掌業務を円滑に推進できたか。	B	分掌業務と各期業務(基礎期(1・2年)・充実期(3・4年)・発展期(5・6年))の分立体制で5年が経過し、組織体制の在り方は定着してきた。一方この体制に至る経緯の周知が求められたり、昨年度で業務推進の部分に改善の課題があったため、一度この体制を振り返る期間を設け、より効率的かつ合理的なアプローチができるかを検討する。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。 ・組織運営に関わる考え方には様々な方向性があるため、完全な一致を求めることは非常に難しいと思います。 ・令和7年度で検討期間を設けることにより、さらなる理解が深まることを期待します。				
研修	生徒・保護者・教職員が課題探究的な学習を行うための環境整備を推進することができたか。	A	今年度より、教員研修を選択制とし、教員のニーズに合わせて研修内容を選ぶことができるようにした。授業改善やIBの理解を深める研修だけでなく、今年度は学校課題を各チームで設定し、分析や提言を行った。学校運営に関わり、多くの教員が意識を高め、次年度に向けた課題を整理することができるようになった。また道外研修も充実させ、日本全国のIB校や先進校に教員を派遣し、研修した内容を教職員にしっかりと周知することができ、より具体的な学校課題を考えるきっかけとした。	A	A
	研修等で得たIBプログラムやSSH等の情報を保護者・教職員間で共有することができたか。	A	各教員が参加した研修について、校内研修や通信等で共有することができた。IBプログラムやSSH等の取組は学校公開、HP、研究報告会等で共有することができた。引き続き、IBやSSHの取組を保護者にも理解して頂けるよう積極的な情報をHPや学校通信等で発信していく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
保護連携者・情報地域提等供との	入学を考えている児童に対し、必要な情報を適宜発信することができたか。	A	今年度の学校説明会は、9月の1回の開催で募集要項を配布し、入学を考えている小学生に対して在校生が模擬授業や校舎案内を担当し、本校生徒のすがたを感じてもらった機会とした。また、保護者には教頭の進行による本校教職員によるパネルディスカッションを実施し、より深いIBの理解を促すことができた。	A	A
	学校だよりやホームページ、懇談会などを通して、学校の様子がよく分かるように伝えているか。	A	今年度は、すぐーを活用した学校だよりの配付に変更することで、より細やかな情報発信に務めることができた。また、ホームページで「学校トピックス」の更新を継続することにより、リアルタイムに情報を発信することができ、9割近くの保護者から高い評価を得ている。学校公開日、PT会公開講座等の出欠確認をすぐーのアンケート機能で行ったが、出席と入力した人数と実際に足を運ぶ人数との差があり、保護者への細やかな呼びかけが課題となった。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
教育整備環境	タブレット端末や他のICT機器は、課題探究的な学習を行う上で効果的に活用されているか。	A	GIGAスクールでは、市教委貸与端末(1～3年生)及びBYOD端末(4～6年生)を安定して活用できる環境やオンライン上で閲覧できるリソース(百科事典や新聞記事DB)を整備した。セキュリティや利用に関するガイドラインを周知し、生徒は端末を自己管理できるスキルを身に付けている。今後は、新たな課題が出たときに早期対応し、環境整備ならびに運用に反映していく必要がある。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				